

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第27回 「ナイル川源流橋」ついにオープン

9月末から10月にかけて、多くの記念すべき行事に恵まれました。まず長野県の立科町長一行のウガンダ訪問です。立科町は2020年東京五輪・パラリンピック開催に向けてウガンダ選手団を迎え入れる自治体です。泉佐野市に続いて二つ目の受入れ自治体となりました。10月5日は本格的日本食レストラン「Yamasen」のグランド・オープン、カンパラ市内に日本人シェフ常勤のレストランが初開店しました。10日は日本・ウガンダ協力の象徴ともいべきJICAによるナカワ職業訓練所支援50周年記念行事がありました。教育スポーツ大臣のムセベニ大統領夫人ご臨席の盛大な記念式典となりました。その1週間後には日本が初めてウガンダ政府に直接供与した円借款で建設していたナイル川源流付近の斜張橋の完成開通式。そして、20日には「Yamasen」の庭を借り開催し、500人を超える人々で賑わった第4回日本祭り、とカンパラ通信の話題に事欠きませんでした。今回は、これら行事の中から日本とウガンダの友好・協力関係のシンボルと言えるナイル架橋について取り上げることにしました。他の話題のうちの幾つかは別の機会に取り上げたいと思っております。どうぞご期待ください。

ナイル川源流付近で日本と韓国の企業がジョイント・ベンチャーで新しい橋を建設していることは第14回のカンパラ通信で少し触れました。10月17日この橋の開通式がムセベニ大統領ご臨席の下盛大に催されました。開通式終了後の当日は車道を含めて橋の上は式典に集まった市民に開放され多くの人々が行き来しましたが車両は通行止めでした。翌18日からは早速一般車両の通行に供されましたので、本格的に紹介させていただきます。



(ナイル川源流橋全景—奥に見えるのが旧ナイル架橋)

私のナイル架橋建設計画との出会いは、少なくとも2007年に遡ります。もしかしたら2006年かもしれません。つまり自分が在ウガンダ日本大使館の次席館員を務めていた前回のウガンダ勤務時代にまで遡るということです。ケニアのモンバサ港からナイロビを経由し、カンパラに続く道路は北部回廊と呼ばれます。ウガンダの物流はこの北部回廊に頼り切っているのは今も昔も変わりません。鉄道はメーターゲージと呼ばれる狭軌線路が敷かれています。理由はよくわかりませんが前回の赴任時そして今も機能していません。当時ビクトリア湖の水運もきちんと機能した貨物用船舶が無い、今も不十分なままです。さて、このウガンダにとっての物流の大動脈ともいべき北部回廊はナイル川を渡り首都カンパラまで続かなくてはなりません。そのナイル川を渡る橋はナイル源流から数kmくらい北に下ったナルバーレ水力発電所のダムの上に架けられています。橋の完成は1954年、私の生まれ年と同じで覚えやすいです。その橋の耐用年数は50年と言われ、完成から50年を経た2006年ごろにはそろそろ橋に亀裂が入っているところも出てきたなどと言われていた時代でした。その様な理由で橋上を走行する車両の時速も、2006年には20km/時に制限されておりました。



(ナルバーレ橋・旧ナイル架橋)



(新ナイル架橋完成予想図)

その頃既に日本の財政支援と日本企業の技術は、カンパラ市内の主要交差点に道路改善の実績を示していました。2006年前後にウガンダ側からナイル川に新たな橋の建設という話が舞い込んだ理由は、将にこの日本の財政力と日本企業の高い技術に着目してのことだったのでしょう（ところで、今回改めて大使館内の公文書を調べてみました。すると1999年末にナイル架橋建設のための無償資金援助の要請がウガンダ政府から在ウガンダ日本大使館に提出されていたことを知りました。そうしますと私が思っていた時期を相当遡って、ウガンダ政府が日本にナイル架橋建設を期待していたということになるようです。）。こういう一大国家プロジェクトですので、当時のスルマ財務大臣はムセベニ大統領の特命を受け2007年の秋出張先のワシントンから急ぎよ東京を訪問し、日本側とナイル架橋の借款獲得に向けて話し合いをしました。この頃カンパラでも当時の菊池龍三大使、そしてその後任の加藤圭一大使がウガンダ側の公共事業大臣と話し合いを重ね、その下でJ

I C Aウガンダ事務所も盛んに動いておりました。私もこれらの話合いの場に同席したり、事務レベルの担当高官と協議をしたりしておりました。そしてこの円借款供与、当初はアフリカ開発銀行との協調融資で動いていたところをウガンダ政府に対する直接の円借款案件にと尽力したのは加藤大使の手腕が働いたと側聞しています。2008年11月、私はウガンダを離任しましたが、ちょうどこの時にJ I C Aの資金によりナイル架橋の実現可能製に関する事前調査(俗にフィージビリティ・スタディと呼ばれるものです。)が開始され、ナイル川架橋建設への具体的な第一歩を踏み出したのです。このナイル架橋案件はその後順調に進行し、2010年11月にウガンダの首都カンパラで日本とウガンダ政府間合意書に署名がなされ、正式に始動しました。

2014年1月、ムセベニ大統領ご出席の下起工式を迎えました。この間の2012年6月、折りしもウガンダ御訪問中の秋篠宮同妃両殿下がナイル架橋建設予定地を視察するという行事もあり、架橋建設がまさに日本とウガンダの友好関係の象徴となる事業であることを予感させる源となりました。施工業者は、日本の錢高組と韓国のヒュンダイ社が合併を組んで当たることとなり、2014年4月に工事が本格的に開始されたのです。

全長525mで計画されたこの橋は、斜張橋と呼ばれる形式で、2本の逆Yの字のパイロンという高さ69mの塔を建て、そこから鋼鉄製のロープを橋桁につないで橋を支えるというものです。日本ですと瀬戸大橋が同じく斜張橋ですが、パイロンを多数使用していません。パイロンを2本使用と言う点では、横浜ベイブリッジ・大阪の天保山大橋をご想像ください。この種の橋はアフリカでもまだ珍しく、ましてやウガンダでは初めての橋であり、架橋建設発表当初よりそのスタイルに強い関心が集まっていました。



(2016年8月の工事現場)



(2017年4月時点のパイロン建設風景)

2016年6月、私が大使としてウガンダに2回目の赴任をした時からちょうど2か月後の8月9日、ウガンダのメディア関係者に日本の開発援助見学ツアーがありました。その

時このナイル架橋の工事現場をツアーの視察先に組み込み、自分も初めて視察させていただきました。この時期はちょうど工期半ば程で、2つのパイロンのうちの一つは基礎部分が完成しこれから上に向かって建てられていくところ、二つ目のパイロンは水中から建てられるものでこれからというところでした。ダムの上の旧橋を渡る時に新しい橋の工事の進捗具合がよく見えたのも、今回の工事の良いところでした。ウガンダ東部に出張する度に旧橋から工事の進行具合を、時速20kmの車内からゆっくりと眺めておりました。そして2017年7月から鋼鉄製のステイケーブルを備え付ける工事が始まると、ナイル川をはさんだ両側の橋桁が少しずつナイル川中心部部分に向かって伸びていく姿は本当に壮観でした。ついに2018年4月、工事が順調に進んで、橋の真ん中で橋桁がつながったのです。これを記念しアズバ公共事業大臣とともに橋の閉合式を行いました。遂に橋が繋がり閉合したことをお祝いしたのです。そして、工事は最終段階に進んでいくのですが、車線中央分離帯や車道と歩行者道路を分け隔てる壁を作るとともに道路の舗装工事を進め、橋の両端には日本の例に倣いいわゆる「道の駅」の建物の建設に着手しました。これも日本側の発案です。

これはウガンダ側からの強い希望でした。同時にこれまでの主要幹線から新架橋までのアクセス道路の建設工事をし、更に橋の照明工事をしながら、本年9月末に実質的な完成をみました。この間、工事関係者の皆様には人には語り尽くせないご苦労があったと思います。しかしながら事故での死亡者を一人も出さず、大きな災害もほとんど無く無事工事を終えたことには頭が下がるばかりです。架橋工事ばかりではなく、現場の管理体制でも日本・韓国企業の質の高さを示すことができたのではないかと感慨深いものがあります。



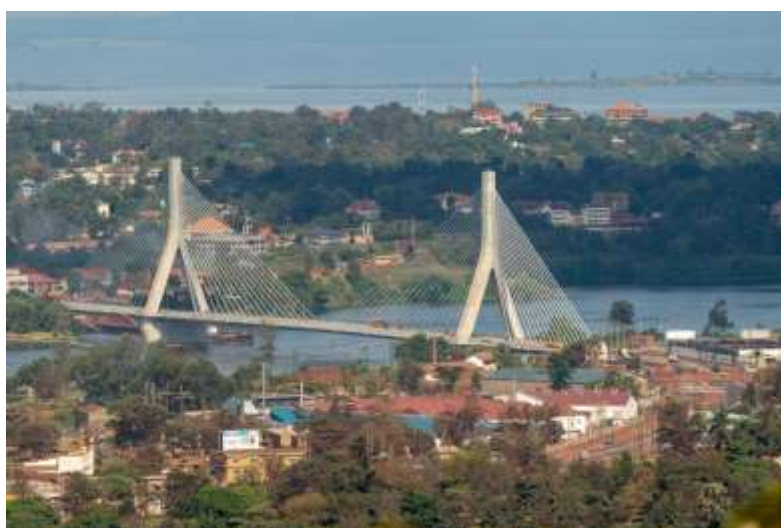
(大統領と副大臣によるテープカット)



(橋の渡り初め)

今年10月17日、新しい橋の開通式がムセベニ大統領ご臨席の下盛大に行われました。この記念すべき日に、日本からは佐藤正久外務副大臣が駆け付けてくださり、大いに日本の存在感を示していただきました。テープカット及び記念碑の除幕をムセベニ大統領と佐藤副大臣の二人で行っていただいた後、遂に渡り初めとなりました。その後橋の反対側付近の広場に設置された大テントの下で要人による祝辞となりました。私は、関係者の祝辞を聞いているうちに胸にこみあげてくるものがありました。さて、自分が祝辞を述べる順

番になりました。このカンパラ通信の冒頭のところでも述べましたが、前回のウガンダ赴任の機会にナイル架橋に日本が円借款を供与するという正式決定に持つていくまでの手続において自らも携わったことに触れました。そして、祝辞の最後は、2010年11月の二国間合意の署名時の加藤大使のスピーチの最後の部分をそのまま借用させていただき、「ナイル架橋の建設は、人々の交流を活性化するとともに、ビジネスや貿易の機会を拡大するものであり、ウガンダのみならず東アフリカ地域により多くの繁栄と明るい未来をもたらすものと信じている。本案件がウガンダと日本の友好関係をより強くするとともに、人と人をつなぐ21世紀の夢の架け橋となることを期待している。」と結びました。こうすることにより自分らしい祝辞をご披露できたと自負しています。



(ナイル川源流橋遠景)

この橋の評判は、建設中から非常に高く、「美しい橋ができそうだね」、「いつ完成するのか」、「完成が待ち遠しい」といった声を私もよくいろいろな人から聞かされたものです。そして開通式が近づくにつれて当国の日刊紙で取り上げられる頻度も高まりました。私へのインタビュー記事の企画もなされ、メディアへ登場する機会も増えたのは、ウガンダに対する日本の貢献がウガンダの人たちに好印象で受け入れられる点からも喜ばしいものでした。橋の名前は、地元の声聴きながら、大臣レベルで「ナイル川源流橋」と「キーラ橋」に絞られ、最後はムセベニ大統領が「ナイル川源流橋」と決められた由とのことです。アズバ公共事業大臣にこの大統領決定が伝えられたのは開通式の3日前の14日のことだったそうです。この橋からそう遠くないところにビクトリア湖とナイル川の境にまさに「the Source of the Nile」という地点があり、観光名所にもなっているところなので、このナイル架橋にその名前が付けられたのはふさわしいと言えましょう。



(ナイル川の源流ポイント)



(ライトアップされた橋)

「ナイル川源流橋」は、片側2車線、合計4車線でスピードはこれまでの4倍の時速80 kmでの通行となっています（旧橋は、片側1車線の合計2車線でした。）。東アフリカの北部回廊という経済大動脈を円滑に結びつける橋であるため、ウガンダをはじめとする東アフリカ地域全体の経済・貿易活動に死活的な役割を果たすとともに、その美しい姿故にジンジャという観光地域の新たな観光スポットとしての役割も期待されています。夜はライトアップし、美しい姿が夜空に浮かび上がるようになっています（ただし、電気代がかかる理由で実際にライトアップされるのは独立記念日等ウガンダの重要な祝祭日に限られるようです。）。「ナイル川源流橋」は、本来の橋としての役割ばかりではなく、日本とウガンダの開発協力の架け橋として象徴となることでしょう。

そして、両国間の永続的な友好の象徴として電気代を心配することなく永久に輝き続けるものと確信しています。

(以上)